

【研修報告】

「TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017」に参加して

奥村 ゆかり*, 田中 聡子*, 中村 敦子*,
渡邊 聡美*, 勝田 真由美*

はじめに

Thailand Nursing and Midwifery Council (TNMC) の主催による2017年 WANS 世界看護科学学会 (International Nursing Research Conference) が10月20日 (金) から22日 (日) の3日間にわたり、タイのバンコクのミラクルグランドコンベンションホテルで開催された (写真1)。この学会は、世界的な健康問題に関連した研究、実施、管理および教育の進歩、看護研究における国際協力、ネットワークおよびパートナーシップの育成と継続に貢献し、グローバルヘルスと看護の革新のために、世界の健康に関連する看護の問題と動向について話し合うことを目指している。学会開催期間中は、タイのプミポン国王の死後1年間の喪中にあたり、オープニングセレモニーでは国王を偲び、歌をささげ、全員で黙祷した。3日間で109の口演と367の示説発表があった (表1)。

WANS (World Academy of Nursing Science) 世界看護科学学会

今回の大会テーマは“Culture, Co-creation, Collaboration for Global Health”であった。基調講

演では、2000年9月にニューヨークで開催された国連ミレニアムサミットで立てられた8つの目標であるミレニアム開発ゴール (MDGs) の達成状況として、妊産婦の死亡率は減少したが、5歳以下の子供の死亡率の減少は未達成であると報告された。その後、2012年にリオデジャネイロで開催された国連持続可能な開発会議において、MDGsを土台としたサステイナブル・ディベロップメンタルゴール (SDGs) 17の目標が立てられ、貧困に終止符を打ち、地球を保護し、全ての人々が豊かさを享受できるよう普遍的な行動が呼びかけられている。その中で、健康上の問題に対して、分野を超えた協力的な活動の重要性が強調され、看護にとどまらず、異なる分野が協力し合って行動を起こしていくことが重要であると述べられていた。また、2014年から2016年のWeb上での論文の傾向において、「分野横断的な健康」や「社会的な平和」をキーワードとした論文が増加していることが報告された。

口演では、外国籍患者が増加している現状を受けた看護師の言語サービスに関する研究報告があり、特に中国語への対応が不足していることが明らかにされていた。その他、オンラインによる学習システムについての研究や、ダブルケアする介護者の不安についての研究がみられた。タイにおける博士課程を修了した看護師の労働力についての研究では、60%が教育機関に25%が保健機関に就労し、この2年間において研究と教育を両立させているものは75%であることが示されていた。ヘッドナースの能力スケールの開発の研究では、IT活用能力やモラルがスケールに取り入れられていることが興味をひき、自らのIT活用に加えて、高齢者がITを活用できるための指導力が求められていると感じた。

さらに、患者中心の介入についての報告では、介入研究を患者のケアに役立てることが重要であると強調され、近年の介入研究では、個人に適合しない

表1 プログラム

10.20	
AM	The Mourning Ceremony Remembrance of His Majesty kin bhumibol Adulyadej Opning Ceremony Keynote 1・2 Exhibition & Poster Presentation 2times
PM	Concurrent Session 1・2 (Oral Presentation) Special Issue (Room1~5) Welcome Reception
10.21	
AM	Keynote 3・4 Panel 1・2 Exhibition & Poster Presentation 2times Lancheon Symposium 1・2
PM	Exhibition & Poster Presentation Concurrent Session 3・4 (Oral Presentation)
10.22	
AM	Special issues in Research Methods and Their Implication(Room1~4) Keynote 5・6
PM	Panel 3・4 Wrap-up Session Closing Ceremony

* 日本赤十字広島看護大学



写真1 ミラクルグランドコンベンションホテルの会場にて

という理由で介入研究への協力が得られにくいケースが増えていることが述べられていた。また、尺度を用いる際には、研究目的に合致した適切な尺度を選択しなければならないこと、既存の尺度を選定することもよいが、必要時新しい尺度を開発することも重要であると述べられていた。

Special Issues

Teenage Pregnancy「10代の妊娠」に関するディスカッションに参加した。演者は、大学教授、ユニセフの担当者、保健省の担当者の3名で、プレゼンテーションのあとにディスカッションの時間が設けられた。全世界に比べて、タイ、特にタイ北部は10代の妊娠の割合が高い傾向にあるが、実数は公表されていないため、実際はもっと割合が高い可能性がある。タイ北部の妊娠率の高さは、宗教上の理由と考えられているが、宗教問題に介入することは難しく、実際の具体的な介入はできていないということであった。タイの性交渉の初体験の年齢は12~14歳であるため、10歳頃から避妊方法を含めた性教育を開始していく必要があり、低年齢からの性教育が実施されている。なお、家族や医療者も、10代の相談しやすい相手となるよう努力する必要があり、低年齢化を認識して受け入れていく必要があると報告されていた。その際に、判断しない、差別しない、偏見を持たないという3つの心得が必要であることが述べられていた。

日本においても、10代の妊娠や中絶は多く、若年が出産し、育児をする際のサポート不足などの課題がある。タイの若年に対する性教育の例を参考にしながら、わが国でも、適切な性教育が行われるよう考えていく必要があると感じた。

学会発表

「Effects of Sex Education upon Entering

University on First-Year Japanese University Students」というテーマで示説発表を行った(図1, 写真2)。わが国の学校における性教育には課題が多く、必ずしも性教育の目標やねらいに結び付いていないのが現状である。文部科学省は、心身の機能の発達に関する理解や性感染症の予防の知識などの科学的知識を理解させること、理性により行動を制御する力を養うこと、自分や他者の価値を尊重し相手を思いやる心を醸成することが重要であるとしている。今回、性に関して生物学的および人間学的側面から学ぶことで、健やかに学校生活を過ごすために必要な知識や社会的なルールを理解すると同時に、性に関する自覚と意思決定を適切に行うための力を育むことを目的に、性教育を実施した。

大学1年生100名を対象に、月経時のセルフケア、正しいダイエット、性感染症の予防、望まない妊娠、彼(彼女)との付き合い方の内容で、60分間の演説とクイズによる性教育を実施した。本研究は、所属大学の研究倫理委員会の承認を得て実施し、測定用具は、自尊感情尺度と青年期アサーション尺度および自記式の性教育の理解度のアンケートを用いて、性教育の効果を検証した。その結果、性教育前後の

Effects of Sex Education upon Entering University on First-Year Japanese University Students

Yukari Okumura¹, Tomomi Kameishi¹, Mayumi Katsuta¹, Aisuko Nakamura¹,
Satomi Watanabe¹, Azusa Koresawa¹ and Satoko Tanaka¹
¹Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing, Hatsukaichi, Japan

Introduction:
Sex education in Japanese schools is fraught with challenges and is not always connected to the broader aims of sex education as a whole. The Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology places importance on (1) helping students understand the development of mental and physical functions and acquire scientific knowledge of issues such as preventing sexually transmitted diseases; (2) fostering the ability to control behavior through reason; and (3) fostering the mindfulness to respect one's own values and the values of others and behave with consideration toward the partner.

Objectives:
The sex education was administered and its effects verified to help the adolescent subjects acquire necessary knowledge and understanding of social rules for leading a healthy school life by learning about the biological and anthropological aspects of sexuality, while at the same time developing an awareness of sexuality and the ability to make appropriate decisions about sex.

Methods:
A 60-minute sex education demonstration and quiz was administered to 100 first-year university students. The content focused on self-care during menstruation, correct diet, prevention of sexually transmitted diseases, unwanted pregnancy, and ways of engaging with boyfriends (or girlfriends). The research was approved by the research ethics committee of the university where the study was conducted and the results were measured using a self-esteem scale, an adolescence assertion scale, and a self-administered questionnaire to measure students' degree of understanding of the sex education.

Results:
After receiving the sex education, self-esteem increased significantly from 30.68 to 32.08 ($p < 0.001$) and assertion increased significantly from 57.57 to 59.37 ($p < 0.001$), showing a weak positive correlation in the rate of change for each measure ($r = .304$). In addition, degree of understanding of the education content was significantly higher among female students than male students ($p < 0.05$).

Conclusion:
The sex education administered by the researchers had the effects of increasing the self-esteem and assertion of the subjects.

Keywords: (sex Education, self-esteem, assertion, adolescence, sexuality)

図1 筆者の発表ポスター

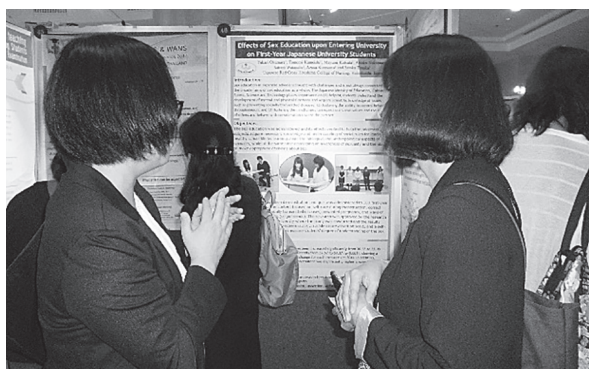


写真2 示説発表

自尊感情は、30.68から32.08 ($p < 0.001$), アサーションは57.57から59.37 ($p < 0.001$) へと有意に上昇し、各変化率に弱い正の相関が見られた ($r = .304$)。さらに、教育内容の理解度は、男子より女子の方が有

意に高かった ($p < 0.05$)。以上のことから、研究者らが行った性教育は、大学生の自尊感情およびアサーションを上昇させる効果があることが明らかになった。

おわりに

今回2017年 WANSに参加して、国際社会では、看護とは異なる分野との協働が求められていることを学び、今後も実践の中から研究を行い、それを実践に還元していくことの重要性を改めて感じた。

謝 辞

なお、本学会への参加は、日本赤十字広島看護大学海外出張旅費助成を受けて行いました。このような貴重な機会を与えて下さいました本大学および関係者の皆様に深く感謝いたします。

